

ブルガリア建築事情

ヨーロッパの場末、ブルガリアにて

山崎揚史

ブルガリアの現状に潜む同時代的問題

ベルリンの壁が崩壊して25年が経った。ここブルガリアでも社会主義時代を知らない世代が増えてきた。

首都ソフィアもいつのまにかソ連製のモスコビッチや東ドイツ製のトラバントは消え、それに代わって西側のスタイリッシュな車が街に溢れ出した。ポルシェやベンツの高級新車をよく目にすることもある。街には洒落たカフェがいくつも



ソフィアの中心街の典型的な光景。新型車両と修繕のままならない朽ちた外壁の建築、街路とのコントラストが日常の風景だ

でき、今時のファッションを着こなしたブルガリア美人がスマホ片手におしゃべりに興じる。外資の高級店の入る巨大モールもあちこちにでき、休日となると家族連れであふれ、駐車場も満杯だ。こんな様子を見るとブルガリアも良くなったと感じるかもしれない。確かにモノは以前に比べると見違えるほど増えた。

しかし、ここはEU加盟国内の最貧国、一步裏通りに行くと道路の舗装はガタガタ、時には穴もある。外装が剥がれ落ちたままの経年変化実験をしているような建物が軒を連ねる。部分的に建物の修繕はされ始めたが、無秩序な応急処置の修繕が惨めさを醸し出す。確かに醜く汚い。しかしそれはスラム街にあるような脂っこい汚さでなく、「はたけばとれるホコリのような汚さ」と、フランスからきた友人がパリと比較しながら言っていた。

相変わらず続く緊縮財政により公共アメニティの整備は疎かにされたまま、わずかな年金、平均給与がドイツの7分の1、いつも失業の危機にある労働者、収賄と搾取が日常化してしまった政治家や官僚、経済格差、社会問題は山積している。享楽と悲惨が交錯する不条理な社会のなかで市民は生活しているのである。その状態を善悪の判断以前に受け入れ、生活する他ないのが現状だ。もちろん、ほんのわずかな新興財閥以外の市民たちは、この状況を望んでいないことは確かである。

これを旧社会主義国の社会現象という縁遠い事象として、日本では判断されてしまうかもしれない。しかし、ここに私たちが享受してきたモダニズムを基盤にすえた社会構造の限界を感じるのである。もちろん、そこで生まれてきた建築そして都市にも同様なことがいえよう。より豊かな生活をめざし走ってきた私たちに何か警笛を鳴らしているかのように見えるのである。いわば、僕には同時代的な問題と感じるのだ。

歴史の検証なき文化

20年以上前ソフィアに初めて来た時の戸惑いは、今でも鮮明に覚えている。ソフィアの街を知ろうと街や建築の歴史についての情報を集めようとしたが、誰に聞いてもよく知らないのである。その助けとなる出版物すらもない。聞くところによると街の歴史を教えるような教育がまったくないのである。それは、社会主義体制下での教育ゆえだろうと思っていたが、今もまだその状況は続いている。ソフィアの観光ガイドが退屈なものもそのせいだ。この現状は都市と市民のつながりを脆弱なものとし、建築を含む都市文化を貧しいものにしていったと考えている。

そのため、ほとんどの市民の都市における建築の意識は低い。これは、現在のソフィア市民の大多数が、社会主義時代に地方から移住してきた家族であることに因るといわれているが、そのことだけではないようにも感じるのである。

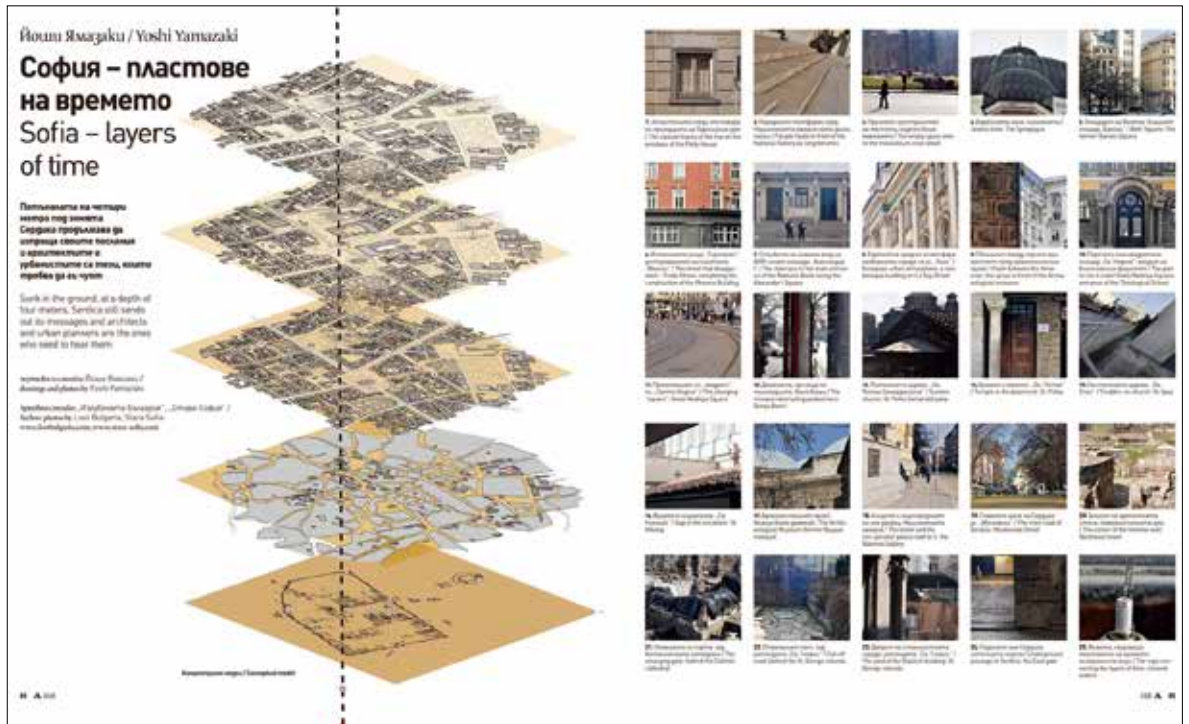
ブルガリアは19世紀末、日本と同じように脱オリエントのヨーロッパ化という近代化が急速に始まった。ヨーロッパ直輸入の建築や都市が外国人技術者や建築家の指導のもとでつくられていった。そして第二次世界大戦後ソビエト傘下の社会主義システムによる国家体制が導入された。社会主義体制というのは、建築、都市から社会経済そして市民生活までをもモダニズム的な機能合理主義の規範で変革させようとする試みである。それゆえ、ここで第二の近代化、再近代化が始まった。そして、今「民主化」というスローガンのもとに始まったEUスタンダードをめざす自由主義社会。

その社会の近代化の変遷のなかで都市や建築を俯瞰し、検証することはほとんどなかったのだ。そこには、当時の列強国の歴史文化への圧力があつた。それぞれの列強国のもとにとられた新体制が、前体制を完全否定し、それまでの文化を世相や風俗から揉み消した。

最初のヨーロッパ近代化は、約500年続いたオスマントルコの統治下で定着したトルコ文化を市民生活から取り除くのに精力を注ぎ、戦後の社会主義時代はヨーロッパから輸入された文化をブルジョワ文化と糾弾し、強引に潰した。そして、今の自由主義の社会は、全体主義化した社会主義の窮屈さと市民への圧政を強調し、確かな検証なく批判のみをする世相をつくりあげた。

結局、すべての時代のもつ文化が熟し、アーカイブ化されぬまま姿を消していったのである。ここに現在、ブルガリアの建築を支える文化的脆弱さの一面と過去の検証なき文化の希薄さを感じるのである。

そんな都市文化の空虚さにいたたまれなくなった僕は、



拙稿「Sofia- Layers of Time」の最初のページ。概念図。(Abitare BG版 vol.18)

数年前よりソフィアの消えゆく都市の歴史的破片を拾い集める作業を始めた。街のなかで蔑ろにされた時代の断片をつなぎ合わせて、都市の時間軸を取り戻す試みである。もちろん組織力のない僕には困難は承知であるが、自分の生活の場でもある街、すなわち自分の置かれたコスモスを認識したかったからである。この作業が、ソフィア市民にわずかでも影響を与えられたらという希望も少なからずある。ここにその一部を紹介したい。

「Layers of Time」

ソフィアという街は、古代ローマから続く歴史をもつ都市である。時代によりその繁栄の仕方は異なるが、都市としての機能は続いてきた。注目すべきは、時代が移り変わってもその都市の中心の位置が変化せず、古代の街の骨格が規範となっている点である。いわば、おのおのの時代が積層する都市として現在に至っている。

都市の様相を時代別にレイヤー化し、その時代のレイヤーを重ね合わせる。この作業によって断絶された時間軸を呼び起こす試みである。ローマの遺構が地下に眠り、都市の時間が地層化していることから、この作業を「Layers of Time 時間の層」と名づけた。

ここでは、いくつかの発見があった。時間の層を貫くように結ぶものがローマ時代から湧きつづける温泉であったり、ヨーロッパ化する近代都市計画が、当時オスマントルコ時代に消滅していた古代ローマのグリッドに沿っていたり、旧共産党本部の厳ついスターリンスタイルの正面ファサードが地下のローマの城壁のメインゲートと対峙していたり、いままで見えなかったものがいくつも浮かび上がってきた。些細な発見かもしれないが、ソフィアの時間軸が立体的に都市空間に出現したような感覚を与えてくれたのである。

記憶から消えてしまったモダニズム

ブルガリア誌に寄稿する原稿を書いている時、一番気を使うのはモダニズムという言葉を使う時である。この言葉を使うと論旨が曖昧になることが多いので、できるかぎり避けている。

それは、19世紀末から20世紀初頭の建築を含むヨーロッパに興った芸術運動について疎い人が多いことにある。一般人のみならず専門家についても同じだ。正確には、美術は初期キュビズムで、建築はゼセッションあたりで完全に途切れる。

近年、アメリカの抽象表現主義やポップアートを正史に組み込んだ美術啓蒙書や情報が流布しているので、だんだん日本での一般的な美術史の把握と似てきたように感じる。個人的にはこの傾向にはかなりの抵抗があるのだが、今回その言及は避ける。

さて、建築においてだが、ゼセッションから急にライトの落水荘やル・コルビュジエのユニテ、ブルータリズムに飛ぶ。その間は、曖昧でむしろ空白に近い。情報の流通や留学経験者も増えてきたことで、少しは20世紀初頭のモダニズムの黎明期を認識していると思いきや、まだまだなようだ。日本人の僕が、誰もまともに語れないということで、ロシアアバンギャルドの歴史について建築大学で講義したくらいである。

この現象の根っことは、社会主義時代にあることは前々から知っていた。ソビエト時代のモスクワで、前



中心部の露出したローマの遺構と社会主義のスターリンスタイルのコンプレックス



ビトシャ通りのジャンゴゾフとラドスラボフによる二棟型集合住宅

衛的な活動をする建築家ぐらいしかこのあたりに興味をもつことはなかったからである。当時の前衛芸術の拠点でもあったモスクワゆえ、興味があれば情報を収集することは可能であった。しかし、スターリンの前衛芸術への弾圧は、ソ連の正史から外されはしなかったものの大きく採り上げることはなかったのである。そのため、その時代の同時代的なヨーロッパ各地の建築を含む芸術運動もほぼ同様に扱われていった。

すなわち、現在のブルガリア建築界の近代史の認識は、依然ソビエトの歴史観のままであるともいえよう。それは、すでにロシアでは消えてしまったようなのだが。

しかし、ソフィア市街には20世紀初頭のモダニズム建築が、数多く見受けられるのである。

それは、主に当時オーストリアやドイツ、フランスに留学した建築家たちの仕事によるものである。第一次世界大戦前後、ヨーロッパには今とは異なるダイナミックな人の流れがあった。無名のル・コルビュジエが東方旅行の際にブルガリアに立ち寄ったのも、非公式ではあるがイタリア未来派詩人マリネッティが未来派の同志を海外に拡大するためにソフィアを訪れたのもこの時である。

中心部は、1920年代前後まで中層住宅建築で町並みは形成されていた。主にネオバロック、折衷主義やゼセッションの様式がここでは採用された。ここに当時「リトルウィーン」といわれた所以がある。

30年代に入り、6階を超えるような中高層集合住宅建設が始まった。ほぼこの時期にモダニズムのデザイン手法が、当時帰国した若手建築家によって始まった。当時のヨーロッパでは最新鋭の建築設備を配したモダンな建築をつくらうとしていた意気込みをそこに感じるのである。

シンドラー社製のエレベーター、曲面大ガラス、温水床暖房などがモダニズムのデザイン手法によってつくられた集合住宅に配されていたのである。そして、ほとんどの住戸が集合住宅ながら玄関の横に勝手口を有し、女中部屋のあるものもある。そこに、ブルガリアに新たに出現したヨーロッパの都市型中流階級の優雅な生活を垣間みるのである。しかし、そのライフスタイルも、第二次世界大戦とその後の社会主義体制によって10数年しか続かなかった。

この時代の代表的な集合住宅が、ソフィアの目抜き通りに建つ、フランス帰りの建築家ジャンゴゾフとラド

スラボフによるものだ。1936年に完成した8階建ての集合住宅は、通りをはさんで対峙するように建ち、二棟型のデザインが今でも目を引く。水平性を強調した横連窓、内部に貫入したような大きめのバルコニー、そして屋上庭園とル・コルビュジエの近代建築の原則を意識したデザインである。

デザインのこだわりは、ディテールにまで及ぶ。その造り込みから船や飛行機といった乗り物のもつスピード感を醸し出しているのである。当時のモダニズムが機械を意識していたことにもつながるのである。ここに、イタリアの未来派とのつながりも感じてしまう。このあたりは、もう少し検証していく課題とも考えている。それは彼らの作品だけでなく、ブルガリアのその当時のモダニズム建築の多くに見受けられるからである。

1か月前、偶然にもジャンゴゾフが1943年に自費出版した小さな著書を手に入れた。ほとんど資料が散逸しているなかで、それは大事な資料であった。そこに気になったことが、書かれていた。それは、ブルガリアの建築家たちが自国の建築を体系化することを怠り、ただ諸外国の建築のコピーに走っていることへの批判と警告であった。それは、ナショナリズムをめざすことではなく、自らデザインを思考し創造することを促しているのである。今まだ彼の批判は、そのまま通用することに、彼の眼光の鋭さとブルガリアの建築界の本質の問題を感じる。

しかし、この建築家たちは社会主義体制のなか建築界から消えてしまった。彼らだけではなくその当時活躍していたモダニズム建築家のことは、今のブルガリアの建築家たちの記憶から消えてしまったように思うのである。

アイデアなき建築

去年、ソフィアの街の中心部の都市再生コンペがあった。EUから多額の資金を引き出すためのプログラムである。自国で設計プログラムを作成し、コンペをすることが、EUからの条件であった。

しかし、その粗雑で無謀な設計プログラムと10数人もいるほとんど市議会議員という審査員をみて参加は見合わせた。予想通り結果は、惨憺たるものであった。コンペそのものの意味をわかっていない主催者や審査員、入賞作品も大きいパネルにCGを張付けただけで満足しているような稚拙なデザインによる案。街の僕の散歩コースがこんなことになってしまうかと思うと悲しさと



ソフィア都市再生コンペの一等案

虚しさを感じた。大きな資金が動き、街のメインの顔になるということで、世間やメディアも騒ぎ始めた。

ある日、僕にこの件についての討論会のパネリストとしての参加依頼がきた。ある社会派のジャーナリストが企画したものだ。市議会議員、主任建築家、建築連盟会長という審査員たちとディベートさせようという試みである。

審査員たちは、自己弁護の言い訳に終始した。EUへの書類提出期限がせまりプログラムや審査が拙速になったのは致し方ないとか、ブルガリアの設計コンペ企画の経験不足だの、最後には専門家だから信じてほしいなど言い出す始末。僕は、拙い言葉で審査員側にも計画案にもアイデアいわば理念がないことを指摘した。「あなたがたは、テレビドラマにでてくるようなキッチュな生活イメージの背景のように、都市のペイサージュを捉えている」と続けた。そして、「審査員は弁護士や政治家みたいな方便を使うのには長けた専門家かもしれないが、クリエイターとしては素人のように見える」と、言い放って帰った。

ブルガリアの歴史の中で人の生活を支える理念は、いつもお上が与えてきた。それに対して疑問をもつことすらもなくなってしまったのである。お上が変わるとまた異なる理念を吹き込む。自分で理念形成する余地を与えない方が、支配者には都合がいいのである。今度は、ちょっとたいへんだ。自由主義社会にはEUスタンダードというノルマはあるものの、そこには理念がないのである。建築についてもいえる。ふと考えると真綿で首を絞められているような気持ちになるのではないかと心配すらするのである。

そうは言ったものの、果たして自分はどうなのか。日本はどうなのかということになってくる。そこにある同時代的問題を感じるのである。

理念というものは、時として言葉にならないことがほとんどのように思う。むしろ、生活や創造行為の隙間のある瞬間に顔を出すことが多いように感じるのである。

僕は、あるもう一つの作業を始めた。モダニズムの時間の流れから完全に取り残された山村の古民家を、ほぼセルフビルドで自分の住処に再生する仕事である。風土に根付き、その風土のなかで生きてきた羊飼いの家に宇宙人のように現われた僕が、自分の居場所をつくる作業である。そして、現地人と共有するコスモスのなかで

の創造行為を通して、何かをブルガリアの人たちに伝えたい、そんな思いがここにはある。もしかすると、その何かは理念そのものなのかもしれない。

先日、帰省したジュリア=クリステバが気になることを言っていた。「必要なのは、信じることと知りたと思う好奇心です」と。



バルカン山村の古民家再生プロジェクト母屋外観



バルカン山村の古民家再生プロジェクト母屋内部、1階玄関

山崎揚史(やまざき ようし)

建築家／Yamazaki + Ivanova architects



1990年早稲田大学にて修士修了後、ソ連給費留学生としてモスクワ建築大学に研究生として留学。ソ連崩壊を経験し、ロシアアバンギャルド研究の傍ら、ポスト社会主義の社会現象を俯瞰し始める。2006年東京からソフィアに拠点を移し、ブルガリア唯一の日本人建築家として現地の建築文化覚醒のための活動を始め、現在に至る。